

同窓会会長賞

「きみはいい子」 中脇初枝（ポプラ社）

健康栄養学科 西川奈那

抱きしめられたい。子供だって大人だって。そんな事を淡々と感じさせられる“きみはいい子”は、2013年坪田譲治文学賞を受賞し、今年度映画化もされた注目作品である。著者は1993年に第二回坊ちゃん文学賞を受賞し、17歳でデビューを果たした中脇初枝。児童虐待をテーマとしているにも関わらずどこか優しくあたたかく、ページをめくる手が止まらない。

この物語は17時まで家に帰らせてもらえない子供、認知症の不安と闘う老女、娘に手を上げてしまう母親、学級崩壊に頭を悩ます小学校教諭、過去に虐待を受けていた母親の介護をする女性を5つのオムニバス形式で描いたものである。この作品の興味深いところは、この5つの物語が少しずつどこかで関連しているところである。登場人物はみな、桜ヶ丘という同じ街で生活し、何かそれぞれの問題を抱えていながらも毎日を過ごしている。そんな中で人と人との繋がりや大切さや、人のあたたかさ、幸せと仕合わせの意味について感じさせられ、考えさせられる。

どの短編も重く暗く、現代における虐待問題や親子問題、子供の心の闇、大人の心の闇が垣間見えるため、自分の心の闇や友人、家族、同じ街に住む人、たまたますれ違う人の心の闇について考えさせられ、少し辛くなる部分もある。決してハッピーエンドとは言えない作品の終わり方ではあるが、この本を読み終えたあと、きっと誰かに「きみはいい子」と伝えてあげたくなることだろう。そして誰もがきっそう思えることだろう。「わたしはいい子」と。